

膵の語源について (4)*

土屋 涼 一¹⁾

アリストテレスの著「動物誌」に初めてみられる pancreas の言葉の前に「kalumenon いわゆる」という言葉が被せられている意味を探るため、前回5つの問題を提起した。すなわち①動物誌の内容は人の解剖学的知識といかに関わっているか？ ②動物誌の創作年代は？ ③当時あるいはそれ以前に人体解剖は行われたのか？ ④ヘロフィルスの影響は考えられないか？ ⑤アリストテレスまたはヘロフィルスの後継者が動物誌を改訂したということはないのか？ の疑問である。

I.

まず動物誌の内容に人の解剖学的事項の記述の有無について検討した。

幸いなことに、わが国では岩波文庫から島崎三郎訳の「アリストテレス動物誌」¹⁾が出版されている。

この本は Teubner 古典文庫中の L. Dittmeyer, Aristotelis De Animalibus Historia, 1907 を底本に用いているが、Bekker 版の頁数と行数を示しており、章の見出しは Oxford 版のアリストテレス著作集中の D'Arcy W. Thompson, Historia Animalium にならったとしている。人に関係する章の見出しをみると第1巻ですでに、

- 第7章 人体の外部(頭蓋)
- 第8章 人体の外部(顔)
- 第9章 人体の外部(眉と眼)
- 第10章 人体の外部(眼つづき)
- 第11章 人体の外部(耳, 鼻, 顎, 口, 舌)
- 第12章 人体の外部(頸, 胸)
- 第13章 人体の外部(腹と腰 子宮と陰茎)
- 第14章 人体の外部(女性陰部 各部に共通な部分)
- 第15章 人体の外部(背部と肋骨 上下右左の相違腕と脚)
- 第16章 人体の内部(脳 気管と肺 食道と胃と腸)
- 第17章 人体の内部(心臓 肺臓 横隔膜 肝臓と

脾臓 腎臓と膀胱)

と初めから人体の解剖について述べている。さらにその内容として、次にあげるいくつかの文章(下線を施した部分)のように、人に関連することが述べられている。

第1巻第6章動物界の諸類, 動物研究の方法のうち p. 37 で「まず最初に動物体を構成する諸部分をあげなければならない。なぜなら、——最も著しい第一の相違点はその部分にあるからで、——その中でも、まず、人体の諸部分をあげなければならない。なぜなら——われわれ人間にとって動物中で最もよく知られたものは人間である、ということは当然である。」

第16章人体の内部(脳 気管と肺 食道と胃と腸) p. 50 で、「人体の外から見える部分の配置は以上のとおりであって、動物中で最も明確な名称が付けられているし良く知られてもいるが、内部となると、その反対である。人体の内部は動物中でも最も知られていないものであって、そのためにヒトの性質に近い他の動物の体の内部に戻って調べなければならないのである。」

第17章人体の内部(心臓 肺臓 横隔膜 肝臓と脾臓) p. 56 において、「人の横隔膜は体の割にしては厚い方である。横隔膜の下には右側に肝臓、左側に脾臓があり、自然状態でこれらの部分を持っている動物なら、みな同様である。ヒトの脾臓は見たところ細長く、ブタのに似ている。肝臓には、通例たいていの動物では胆嚢があるが、ないものもある、ヒトの肝臓は球形で、ウシのに似ている。」

【筆者注：アリストテレスは自分でヒトの脾臓や肝臓を見たのであろうか？ 記載の上では見たように思える。もし見たとするならば、何故ここに pagkreas のことを記載しなかったのだろうか？】

さらに第3巻第2章にシュエンネシスとディオゲネースによる人体血管の分布、第3章にはポリュポスによる人体血管の分布、そしてパングレアスの出てくる第4章は著者の見解による血管分布が書かれている。このような文脈からみると、アリストテレスは人体解剖を意識し

* Etymological Consideration of the Pancreas

1) 長崎大学 (〒 852-8051 長崎市坂本 1-12-4)

てパankreasという言葉の前後の文章を書いたことは明白である。

①キュプロス島の医者シュエンネシスは (p. 108)

「太い血管は、眼から出て眉をよぎり、背中を通り、肺をよぎり、乳房の下へと、1本は右から左、1本は左から右へ行く。左の乳房から出るものは、肝臓を貫いて腎臓と睪丸に入るが、右から出るものは脾臓と腎臓と睪丸に入り、睪丸から陰茎に入る。」

【筆者注：この文章の前にアリストテレスは、非常にやせた人体で観察した人々は、やせて体表に現れた血管からその起始を結論したとあるが、このシュエンネシスがその例であろう。】

②アポローニアのディオゲネースは (p. 109)

「人体の血管は2本が最大であって、これは棘骨〔椎骨の棘突起〕に沿って腹部を通り、1本は右側〔大静脈〕、1本は左側にあつて〔大動脈〕、夫々の側の脚に入り、上の方は鎖骨をよぎり〔鎖骨下動静脈〕、咽喉を通過して頭に入る。この2本から血管が出て全身に及び、右の1本からは右側、左の1本からは左側に達している。

最大の2本は棘骨自身の付近で心臓に入るが、別の血管がもう少し上の方で胸を通り、脇窩で〔脇窩動静脈〕それぞれの側の手に入る。これらのうち〔左手の〕1本は「スプレーニーティス」〔脾脈〕、右の1本は「ヘーパティーティス」〔肝脈〕といわれる。両者の各先端は親指に行くものと、手掌に行くものに分かれるが、後者はさらに細くなり、沢山に分れて手の他の部分や指に達する。〔2本の〕主要な血管からは、また別のもっと細い血管が出るが、右のものからは肝臓に、左のものからは脾臓と腎臓に入っている。脚に入るものは、脚の付け根のところで分かれ〔総腸骨動静脈〕、大腿の全域に分布する。その中の最大の1本は大腿の後側を歩き、太く見える〔大腿動静脈〕。もう1本は大腿の内側で、太さは前者よりわずかに劣る〔大伏在静脈〕。両者はさらに膝を過ぎて下腿と足に入る。そして手に入る血管と同じように足底に下り、そこから指に達している。また、最大の〔2本の〕血管からたくさんの細い血管が分れて、胃にも肋骨にも達している。咽喉を通過して頭に入るもの〔内頸静脈〕は頸のところで大きく見える。その各々は終端でたくさんに分れて頭に入るが、右側から出るものは左側へ、左側から出るものは右側へ入る。しかし、いずれも耳のそばで終わる。頸部の各側の大きな血管のわきには、それより少し小さい別の血管〔外頸静脈〕があり（この中へ頭自身から出たいの血管が合流している）、これらは咽喉を通過して内部に入る。また、これらの各々からは、肩甲骨の下に達するものと〔肩甲上静脈〕手に入るもの〔橈側

皮静脈〕が出るが、脾脈と肝脈のわきでは別の少し小さい血管に見える。皮膚の下が痛むときは、これらを切開するが、〔もっと深く〕胃のあたりが痛むときは肝脈と脾脈を切開する。乳房の下にも、これらから別の血管が出ている。また別の血管がこれらの各々から出て脊髄を通り、睪丸に入るが、細いものである。また、別の血管が皮膚の下の肉の中を通過して腎臓に入り、男では睪丸に入って終わるが、女では、子宮に入って終わる。腹部から出たばかりの血管はかなり広いが、やがて狭くなり、ついに右側から左側へ、また、左側から右側へ移る（これらは「スペルマティデス」〔精脈〕といわれる）。血液の一番濃いところは肉に吸いとられるが、そこであふれて上述の場所に入る時は、薄く暖かくなり、泡立ってくる。」

③ポリュボスは (p. 111)

「血管は四対ある。その一対は頭の後から、頸の外側を通過して背骨の両側に沿い、腰の後に至り、脚に入るが、それから下腿を通過して外果の外側に達し、足に入る。それゆえ背中と腰の痛みには膝窩と外果の外側から血管切開〔瀉血〕を行うのである。また、別の一対は、頭から耳のわきを過ぎ、頸を通る「スパギーティデス」〔頸脈〕と称するもので、それぞれ内部を背骨に沿って下り、腰肉のあたりから睪丸と大腿に入り、膝窩の内側と下腿を通過して内果の内側と足に達する。それゆえ、腰肉と睪丸の痛みも膝窩と内果〔の内側〕から血管切開〔して瀉血〕を行うのである。第三対は、側頭から頸を通り、肩甲骨の下から肺に達するもので、その中の右側から出るものは左側へ、すなわち、乳房の下から脾臓と〔左側の〕腎臓に入り、左側から出るものは右側へ、すなわち肺から乳房の下へ行って、肝臓と〔右側の〕腎臓に入るが、両方とも肛門に終わる。第四対は、頭の前部と眼から出て、頸と鎖骨の下に行き、そこから上腕の上部を通過して〔肘の〕関節に入り、それから、前腕を通過して手根と指の関節部〔手掌〕に達し、また上腕の下部を通過して腋窩に入り、肋骨の上部に達し、ついに、1本は脾臓に、1本は肝臓に達する、それから、胃の上に出て、両方とも陰茎に入って終わる。」

われわれ以外の人々の説は大体以上のとおりである。自然学者で血管を論ずる人は皆同じように血管の起始は頭と脳にあるとしていて、正しくない。観察することは難しいが、動物を痩せさせておいて、絞め殺してみさえすれば、十分に調べることができる。

血管は次のようにできている。胸の内部に背骨に沿って2本の血管があつて、その中の大きな方〔大血管〕は前に、小さな方はその後であり、また、大きな

方はやや右側に、小さな方は左側にあつて、後者は死体においても、その臍状の部分が見られるところから、ある人々が「アオルテー」と呼ぶものである。これら2本の起始は心臓にある。というのは、これらから他の内臓に達している場合には、血管としての特性をいささかも失うことなく内臓を貫いて（すみずみまで及んで）いるが、心臓はあたかもこれら2本の血管の（ことに前方の大きな方の）一部分のようであつて、これはこれらの血管が上と下にあり、心臓がその中間にあるためである。

心臓は、すべてその中に腔所があるが、非常に小さい動物では、最大の腔所でも、やっと見える程度で、中くらいの大きさの動物では、もう一つの〔細小の〕腔所があり、最大の動物では〔中央のあるから〕三つの腔所がある。心臓の（先端は先に述べたように前方に向いているが）最大の腔所は右側最上部に、最小の腔所は左側に、中くらいの大きさの腔所は両者の中間にあるが、後二者は最大のものよりはるかに小さい。これらすべての腔所は、確かに肺に通じているが、血管が小さいので、その開口部は1ヵ所以外はよく分らない。

大血管は右上方にある最大の腔所についているが、さらに腔所の真中を貫いて再び血管〔肺動脈〕となつて現れるので、この腔所は、あたかも湖のように、血液をためる血管の一部分のようなものである。アオルテーは中央の腔所から出ているが、大血管と違って、それよりはるかに狭い管でついている。また〔大〕血管は心臓を貫き、心臓からアオルテーに入る。また、大血管は皮膜状、アオルテーはこれより狭くて、非常に臍状であつて、心臓から遠くのびて頭や下体の方へ行くと、ますます狭くなり、まったく臍状になる。

まず、心臓の上部から大血管の部分が伸びて肺のアオルテーとの結合部に達するが、それまでは分岐しない大きな血管である。しかし、そこから二部分に分かれて一部は肺に達し、もう一部は背骨と頸の最後の椎骨〔環椎〕に達する。

【訳者注：前者は気管支静脈 Vena bronchialis, 後者は奇静脈 Vena azygos をいつているらしいが、もちろん事実と一致しない。】

さて、肺へ行く血管は、肺が〔右左の〕二葉になっているので、まず二部分に分かれ、それから各肺管および肺孔に沿って（大きな血管は大きなのに、小さいのは小さいのに沿って）〔密着して〕走っているの、どの部分をとつても、必ずその中に肺孔と小血管が入っている。事実末端部は小さいので、はっきり分らないけれども、肺全体が血液に充ちて見える。〔大〕血

管から出た管は気管から出た肺管の上を走っている、頸の椎骨と背骨へ行く血管は、そこから再び背骨に沿って走る。

この血管からは〔次々と〕小血管が出て各肋骨の付近と各椎骨に達しているが、血管自身は腎臓の上の椎骨の所で二つに分かれる。大血管のこういった部分は以上のように分岐しているが、これらの上の方では、心臓から出た〔大〕血管〔上大静脈〕が〔右左の腕頭静脈に分かれてから〕その1本は再び分かれて二方面へ向かう。すなわち一方〔分枝の方〕は側面の鎖骨へ行き〔鎖骨下静脈〕、それから腋窩を通過して〔腋窩静脈〕、ヒトでは腕、四足類では前脚、鳥類では翼、魚類では胸鰭に入る。また一方、この血管の基幹部の方は、この血管が初めて分岐するあたりを「スパギーティデス」〔頸脈〕といい、〔大血管から〕分かれて頸に入るあたり〔内頸静脈〕は（肺の）気管に沿って走っている。ヒトではここを外から圧迫すると、窒息はしないが無感覚となり、眼を閉じて倒れることがある。こうして先に進み、かつ気管を間に挟んで、〔下〕顎が頭〔蓋〕にはまるあたり〔顎関節〕の耳の所〔頸静脈孔〕まで来ている。また、そこから4本の血管に分かれ、その中の1本は折れ返つて頸と肩を通過して下り、〔肩と〕腕の関節へ行く血管の初めの方の分岐点に合するが、別の部分は手と指に入って終わる。また、別の1本は耳の付近の両側から脳に達し、多くの細かい小血管に分かれて、脳の周りのいわゆる「脳膜」【筆者注：原文は kalumenen menigga <menigx = meninx (女性)。訳者注：ガレノス曰く「古人はあらゆる膜 hymen を meninx と呼んだ】に入る。脳自身は、あらゆる動物において無血であり、小さいのも大きいのも小血管でこの中に入って終わるものはない。上述の血管から〔4つに〕分かれた血管の残りのものは、その一部は頭をぐるりと取り巻き〔前顔面静脈の前の方の分枝と後顔面静脈〕、一部は非常に細かい小血管となつて感覚器と歯に入って終わる〔前顔面静脈の前の方の分枝、口蓋静脈、頤下静脈、舌静脈等〕。

④有血動物の等質部分（著者の見解による血管分布と心臓）

「大血管」より小さい「アオルテー」と称する血管の部分も、分岐の仕方は同じことであつて、大血管の部分とともに並んで走っているが、ただ、大血管の部分と比べると管が小さいし、〔分岐して〕小血管となると、はるかに小さい。

心臓の上の方の血管は、以上のとおりであるが、心臓の下の方にある大血管の部分〔下大静脈〕は、宙に浮かんだまま下帯〔横隔膜〕を貫き、アオルテーおよ

5 καὶ ἀφανίζεται τὰ ἀπ' αὐτῆς φλέβια εἰς τῦτον. ἕτερον
 δὲ μέρος ἀπὸ τῶν ἀρισερῶν τῆς μεγάλης φλεβὸς ἀπο-
 σχισθὲν τὸν αὐτὸν τρόπον ἀναβαίνει εἰς τὸν ἀρισερὸν βρα-
 χίονα· πλὴν ἐκείνη μὲν ἢ διὰ τοῦ ἥπατός ἐστιν, αὕτη δ'
 ἑτέρα τῆς εἰς τὸν σπλῆνα τείνουσας. ἔτι δ' ἄλλαι ἀπὸ τῆς
 10 μεγάλης φλεβὸς ἀποσχίζονται, ἢ μὲν ἐπὶ τὸ ἐπίπλοον,
 ἢ δ' ἐπὶ τὸ καλόμενον πάγκρεας. ἀπὸ δὲ ταύτης πολλαὶ
 φλέβες διὰ τῶ μεσεντερίᾳ τείνουσιν. πᾶσαι δ' αὗται εἰς μίαν
 φλέβα τελευτῶσι μεγάλην, παρὰ πᾶν τὸ ἔντερον καὶ τὴν
 κοιλίαν μέχρι τῆ σωμαχῆς τεταμένην. καὶ περὶ ταῦτα τὰ
 15 μόρια πολλαὶ ἀπ' αὐτῶν σχίζονται φλέβες. μέχρι μὲν ἔν
 τῶν νεφρῶν μία ὕσα ἑκατέρα τείνει, καὶ ἡ ἀορτὴ καὶ ἡ με-
 γάλῃ φλέψ· ἐνταῦθα δὲ πρὸς τε τὴν ράχιν μᾶλλον προσ-

図1 プロシア王立アカデミー版(通称 Bekker 版)の514頁b欄の拡大図。11行目にパングレアスの字がある(下線部)

び背骨と、たるんだ膜状の管で結びつけられている。大血管のこの部分から1本の、短いけれども広い、肝臓を貫く血管が出ており、この血管からたくさん細かい血管(肝静脈)が肝臓の中へ伸びて消える。肝臓を貫く血管の分枝は2本で、その中の1本は、下帯、すなわち、いわゆる「横隔膜」に入って終わり、もう1本は、再びさかのぼって腋窩を通り、右腕に入って(肘)関節の内側へ下る諸血管に合する。それゆえ医者がこの血管を切開すると、肝臓付近の痛みはとれるのである。この〔肝臓を貫く〕血管の左側から小さいけれども、太い血管が出て脾臓に入り〔肝門脈-脾静脈〕、この血管から分かれた小血管は脾臓の中に消えている。大血管の〔肝臓分枝の〕左側から分かれたもう一つの部分は前の場合と同様にして上にのぼり、左腕に達するが、ただ、あれは肝臓を貫く血管〔の一部〕でありこれは脾臓に入るのとは別の血管なのである、さらに、他の血管が大血管から分岐しているが、1本は、網膜に達し〔胃冠状静脈〕、1本は、いわゆる「パングレアス」〔膵臓〕に達する〔膵十二指腸静脈〕。また、大血管からたくさん血管が出て腸間脈に分布している〔上、下腸間膜静脈〕。これらは、すべて腸全体および胃に沿って食道に至る1本の大きな血管に終わっている。また、これらの部分のあたりには、以上の血管から分かれた多くの血管が分布している。

さて、腎臓の所までは、アオルターも大血管も1本のまま〔分岐せずに〕のびているが、ここでいっそう背骨に接着し、いずれもラムダ(Λ)状に二分し、大血管は、アオルターより後になる。アオルターは、心臓の付近で背骨に最も接着している。この接着は小さい

腱状の小血管によるものである。アオルターは心臓から出るときは、内腔が相当広いが、先に行くにつれて狭くなり、腱状になる。アオルターからも腸間膜に血管が入っていること〔上、下腸間膜動脈〕は、大血管の場合と同様であるが、ただ、大きさがはるかに劣る。すなわち、狭くて繊維状であり、細くて雑色で繊維状の小血管に終わっている。しかし、肝臓と脾臓には、アオルターから出る血管は1本も入っていない。大血管とアオルターは、それぞれ二分して腰の両側に入り、両方とも骨に付く。腎臓にも大血管とアオルターから血管が入っているが〔腎静脈と腎動脈〕、ただ、これらは腎臓の腔所〔腎盤〕に終わるのではなく、体部〔実質〕に費やされるのである。さて、アオルターからは、この他2本、丈夫で一続きの管が出て膀胱に入っているし、また他に、腎臓の腔所からも〔尿〕管が出ているが、これらは大血管とは連絡がない。また、各腎臓の中央部から中空で腱状の血管が出て、背骨自身に沿った狭い所を通ってのびている。それから、いったん腰の両側に入って見えなくなり、それから、もう1度腰に分布して現れる。それらの末端は膀胱と、雄では陰茎、雌では子宮についている。大血管から子宮に入る血管はないが、アオルターからは緻密な血管がたくさん来ている。アオルターおよび大血管の分枝から、まだ他にも血管が出ている。その中のあるものは、まず鼠径部では、大きくて中空であるがそれから、脚を通して足と足指に入る。また、別の血管が鼠径部と大腿部を通して交差し、1本は左側から右側へ、もう1本は右側から左側に入り、膝窩のあたりで他の血管に合する。さて、以上で血管の経路と起始が明らかになっ

た。

以上、島崎三郎訳「動物誌」の一部を紹介したが、すでに述べたごとく、本書がヒトの解剖を意識して記述されたことは明白である。しかしアリストテレスは人体解剖をしなかったといわれているが、そのためかその記載は不明確きわまりない。それにしてもヒトの心、肺、肝、脾、腎などは、何らかの機会に生体または死体で観察し得たのかもしれない。しかしパンクreasは動物では観たかもしれないがヒトでは見なかったのではないかと考えられる。

その動物誌第3巻第4章に唯一見出される pagkreas(中性)であるが、それに冠せられた kalumenon という語の意味は、“what is called”, “as it is called”あるいは“so-called”, 「と呼ばれる」, 「いわば」「いわゆる」である(図1)。これが他に使われている箇所を検索したところ、既述の脳膜 meninx の他に食道と横隔膜の二つの臓器ないし組織で用いられていた。すなわちアリストテレス著作集 Bekker 版の頁数、行数に従うと、495 a 19 に「oisophagos(男) kalumenos」と、496 b 11 に「kalumenai phrenes(女)」および 514 a 37 の kalumenas phrenas とである。

まず、食道であるが、島崎の訳に由ると原文のその箇所は『頸の内部には、いわゆる「食道」oisophagos一長くて狭いために stomachos という別名がある一と気管がある。』としているが、訳注では『(動物誌翻訳者の)Dittmeyer によると、一般に食道として用いられる stomachos という言葉は ‘stenos 狭い’ と ‘mekos 長さ’ を合せてできたものとアリストテレスが考えたものである』という。

一方 Peck²⁾による同一箇所の英訳文は原著に忠実に『Within the neck is what is called the oesophagus (it gets its popular name from its length and its narrowness), and the windpipe.』となっており、stomachos という言葉は原著にはなく、原著の ‘eponymian’【筆者注：…に因んだ名】を popular name と訳しているのである。島崎の訳文にある『stomachos という』という文章は原著にはなく、島崎が入れた文章である。しかし誤ったものではない。

既述のごとく、脳髄を包む特定の膜として、古人が広く膜の意味に使用した meninx を脳膜として紹介し、その正当化を期待したのかもしれないが、食道については‘いわゆる’という言葉でむしろ元来用いられてきた言葉をかかげ、正当化されることを希望して oisophagos を紹介したとも考えられる。

横隔膜のときの嶋崎の訳分は、一つは『肺臓の下には胴体の隔帯【筆者注：原著 diazoma】(横隔膜) (い

わゆるプレスネス【筆者注：原著 kalumenai phrenes】で、肋骨とみずおちと背骨についている)があるが、中央部は薄くて膜質である。』であり、もう一つは『肝臓を貫く血管の分枝は2本で、その中の1本は、下帯【筆者注：原著 hypozoma】すなわち、いわゆる「横隔膜」【筆者注：原著 kalumenas phrenas】に入って終わり、もう1本は、再びさかのぼって腋窩を通り、右腕に入って…』である。島崎は前文の訳注で「横隔膜は diazoma (隔帯) または hypozoma (下帯) で、diaphragma は鼻中隔のこと」、さらに前文後文の共通の訳注として「phrenes (単数形は phren) も元来横隔膜の意であるが、ここに精神作用が宿ると考えていた時代があった」としている。

したがって横隔膜においても、‘いわゆる’として以前の用語 phren を紹介し、横隔膜の用語を統一することによって、その正当化を期待したものとと思われる。そうすると kalumenon pagkreas においてもアリストテレスは pagkreas をすでに用いられている言葉を紹介したとは思われるが、果してその正当化を希望したのであろうか？ 筆者は単に紹介したにすぎないと考える。

II.

次に動物誌の成立時期についてであるがまずアリストテレスの生涯をふりかえりながら検討する。ディオゲネス・ラエルティオス³⁾によると、アリストテレスは 384 BC に生まれ 17 歳 (367 BC) のときにプラトンの門に入り 20 年間プラトンの下で過した。そして 348 BC プラトンが死んだので【筆者注：文献⁴⁾と⁵⁾ではプラトンの死は 347 BC となっている】、ヘルミアスのところへ旅立ち、そこに 3 年間留まっていた。345 BC にミュティレネへ行った。そして彼は 343 BC にピリッポス王の宮廷へ行ったのであるが、アレクサンドロスはそのときすでに 15 歳になっていた【筆者注：アレクサンドロスは 356 BC 生れなので 13 歳のはずである】。そして 335 BC にアテナイへ戻り、リュケイオンで 13 年間講義をした【筆者注：335~323 BC で 12 年間のはず】。その後 322 BC にカルキスに退いて、その地で病気のために、およそ 63 歳【筆者注：62 歳のはず】の年齢でこの世を去った、という。この訳文を読む限り、年代のみ記載しているが、彼が移動した理由は一切記述されていない。

動物誌の英訳者 Pek²⁾はその Aristotle : History of Animals の Introduction のなかの Date of the Treatise において動物誌の英訳者の D’Arcy Thompson が

表 1 アリストテレスの生涯⁶⁾

紀元前	年齢	年譜	関連事項
384	0	スタゲイラに生まれる	
367	17	アテナイに出てプラトン (60 歳) の学校アカデメイア入学	
356	28		アレクサンドロス生まる
347	37	アタルネオスの支配者ヘルメイアスのところアッソスに行き 344 BC まで留まる	プラトン死亡 (80 歳)
344	40	レスボス島ミュティルネに行き 342 BC まで留まる テオプラストスと共に研究	ヘルメイアス ペルシア軍に捕われ不慮の死
342	42	343 BC アレキサンドロス王子の家庭教師に招聘され, 342 BC マケドニアに行き 335 BC まで 7 年間留まる	ピリッポス トラキア征服
338	46		ピリッポス アテナイ・テバイ連合軍を破り, ギリシアの支配者となる
336	48		ピリッポス (46 歳) 暗殺され, アレクサンドロス (20 歳) 即位
335	49	アテナイのリュケイオンに学校を作る, 323 BC まで 12 年間留まる	
334			アレクサンドロス 東方遠征へ出発
323	61	難を避けてエウポイアのカルキスに移る	アレクサンドロス (33 歳) 病死
322	62	死亡	

彼の研究は主にアテネから離れた中年時代に行われたという説や動物誌について地名を詳細に検討した Sir Desmond Lee が動物誌の研究の多くは 345~343 BC の 2 年間に行われたという説を紹介しながらも、象に関する事項などはアレキサンダー大王の遠征によって得られた情報と思われ、これらは絶えず追加されたものであろうとしている。

堀田 彰⁹⁾は、その著『アリストテレス』で p. 28 に「347~335 BC の 遍歴時代は、アリストテレスが 36~49 歳【筆者注：37~49 歳のはず】の最も実りの多い時期である。動物誌の中には、小アジア地方にのみ見られる動物名があり、その著述がこの時期に属することを示す確実な証拠である。フィリップ殺害の一件を記述している『政治学』の一部も、この時代のものと推察できる。この時期彼は科学者の態度を以て、生物学や人間生活の部面において、見聞した材料を収集・整理していた時期といえよう。これを前期と比較すると、抽象的・数学的色合いが薄らいで、具体的・生物学的な色合いが濃くなっているといえる、と述べている。最後に動物誌を和訳した島崎三郎の解説の部⁹⁾にある、動物誌成立についての考えを引用しよう。すなわち『本書に見られる動物学的知識は、ホメーロス、ヘーロドトス等のような古典からの伝承、当時の民間人、ことに漁夫や漁師から聞いた話、彼自ら調査研究

した事実の集成で、これらを生来の強靱無比な思索力で十分に推考したものである。動物相は大部分マケドニア、ギリシア本土を中心とするエーゲ海沿岸のもので、それにエジプトやインドあたりまでの動物が数種類加えられている。これらはアレクサンドロス大王の遠征軍の齎したものであろう。海岸動物は主としてレスボス島周辺からヘルレスポントス海峡を経て、黒海沿岸までのものである。彼が実地の研究を行ったのは 40 歳前後で、アテナイを離れて、高弟テオプラストとともに、テオプラストスの生地レスボスに滞在した 1, 2 年の短期間にすぎないと思われる。その後、王子だったアレクサンドロスの師となって、マケドニアに帰り、50 歳【筆者注：49 歳のはず】の頃再びアテナイに戻って、リュケイオンの学頭になったが、ここで行う講義のためにまとめられたものが現在の著書である。動物の種類は 520 を超えている。』

以上により、動物の研究と執筆は、早ければ彼が小アジアに出かけた 347 BC に始まり、アテナイに戻る 335 BC 頃にはほぼ完成しており、その後生存中若干の追加が行われたと考えてよいであろう。なおアリストテレスの生涯について、文献によって年譜の数字に若干差が認められたので、文献⁹⁾の既述に基づいて年表を作成した (表 1)。

アリストテレス時代の人体解剖の状況、アリストテ

レスの後継者，ならびにヘロフィルスとその後継者，
そしてアリストテレス著作集の運命等は，次回以後に
譲る。

参考文献

- 1) 島崎三郎 訳：アリストテレス動物誌（上），38-57，
107-119，岩波書店，1998.
- 2) Peck AL：Aristotle, History of Animals Book I-
III, Loeb Classical Library 1 viii~1 ix, Harvard

University Press, 1993.

- 3) 加来彰俊 訳：アリストテレス，ディオゲネス・ラエル
チオス（中）．ギリシア哲学者列伝，13-45，岩波書
店，1996.
- 4) 堀田 彰：アリストテレス．人と思想，45~52，清水
書院，1975.
- 5) 島崎三郎 訳：アリストテレス動物誌（中），356-357，
岩波書店，1999.
- 6) 田中美知太郎：アリストテレスの思想と生涯，アリス
トテレス，5-56，田中美知太郎 編，中央公論社，1996.

* * *